

辻井いつ子さんの子育てに学ぶ

世界的ピアニストとして活躍する辻井伸行さん。その歩みのそばには、常にお母様・いつ子さんの存在がありました。

いつ子さんは、出産直後に「この子の目は見えません。」と告げられ、大きな衝撃を受けます。想像を超える現実に直面しながらも、いつ子さんは立ち止まりませんでした。「できないこと」に目を向けるのではなく、「この子にできることは何か」と常に考えるようにならました。

幼い頃から、伸行さんが音に敏感に反応し、耳で聴いた音を正確に再現する力を持つていて、その芽を大切に育てる環境を整えていきました。日常生活の中に自然と音楽がある暮らしをつくり、無理に先を急がず、本人の歩みに寄り添い続けました。

いつ子さんは、息子さんの一番の理解者であり、最も熱心な応援団長でした。親子二人三脚で困難を乗り越えてこられた姿勢は、「親バカ」と表現されることもあります。しかしそれは、甘やかしではなく、子どもの可能性を信じ抜き、愛情と情熱をもつて支え続ける覚悟の表れだったのではないかと想う。

私たちも日々の関わりの中で、目の前の人への可能性を信じ、伸ばす視点を大切にしていきたいものです。

辻井いつ子さんの関わり方から、私たち教職員が学べることは少なくありません。

まず大切なのは、子どもが示す小さな関心や得意さを見逃さず、それが伸びていく環境づくりを整える姿勢です。成果を急がせたり、周囲と比べたりするのではなく、その子自身の歩幅を尊重しながら関わることで、安心して力を発揮できるようになります。

また、いつもそばで見守り、気持ちを理解しようと努める存在がいることは、子どもにとって大きな支えとなります。時には周囲から過剰だと思われるほど信じ、励まし続ける姿は、決して甘やかではありません。それは「この子なら大丈夫だ」と本気で思い、責任をもって背中を押し続ける覚悟の表れです。私たちも日々の教育活動の中で、目の前の子どもの可能性を信じ、応援し続ける大人でありたいものです。



【今回の学び】⇒子どもの可能性を信じ、待ち、応援し続けること！